



十二 宇宙書記

ああ。きれい。

高校生の真理は、夕食を食べ。終わると、「ごちそうさま」と立ち上がり、「もういいの？」という母の声を背中に聞きながら二階に駆けあがる。ベランダに備え付けられた望遠鏡から夜空の星を眺めるためだ。これが、呼吸するように、真理の日課となっている。

真理はただ単に、星が好きなのではない。望遠鏡を通して星を眺めることが好きなのだ。丸いレンズを通して夜空を見ると、裸眼で見たのでは気づかなかった星の形や赤やオレンジ色のままたたきなど、思ってもいなかった景色や、想像もしなかった事実を知ることができたからだ。真実は微細にこそあるのか。その楽しみを知ると、真理はより一層、望遠鏡で夜空を眺め続けた。

ある日、いつものように遠鏡で夜空を眺めていると、人間なのか、動物なのか、夜行飛行中のボーイングなのか、わからないけれど、音が聞こえてきた。その音を聞くために、耳を澄ます。集中する。

その音は声だった。誰かに話し掛けている。誰に？

その声を聞いているのは自分だ。自分に話し掛けているのか。何を話しているのだ。その声の意味を掴もうとする真理。

わかった。

その声の主が言うことには、宇宙でちりじり、ばらばらになった自分の体がこの町のどこかにあるので、それを探して、集めて欲しいとのことだった。

最初は、その声の言うことが信じられなかった。夢でも見ているのではないかと思った。望遠鏡の見過ぎで、頭が可笑しくなったのではないかと自分を疑った。

だけど、その声の指示に従って、町にある神社の鳥居や公園のすべり台、四つ角の道路の信号機、公衆便所の手洗い場などを訪れてみると、声の言うとおりの、物？があった。

その物とは、髪の毛であり、指や足の爪であった。少しずつ、少しずつだが、それらを集めて、自分のベッドに置いていく。それらの部品は、パズル絵のようにつながっていく。

これが最後だ。真理は、学校の理科の実験室で見つけた目をパズルの中に嵌め込んだ。

突然、2次元が3次元になった。平面だった物体が立ち上がり、ベッドに座った。真理は驚きのあまり、黙ったまま立ち尽くすだけだ。

ありがとう。ようやく形になったよ。

彼は満面の笑みを浮かべる。

だけど、古い世界は嫌だな。

彼は立ち上がると、両手、両足を広げると世界を壊すような大声で叫んだ。

ビッグバン。

その瞬間、真理の体は吹き飛ばされた。真理だけではない。ベッドも勉強机も、愛用の望遠鏡も全てが吹き飛ばされた。真理の父も母も、真理の家も、真理が住んでいた町も、この地球も、太陽系も、宇宙そのものが吹き飛び、消え去った。

痛みはない。だけど、かすかな意識はある。それも、夏の日焼けで剥けた皮膚のような意識だ。でも、体はない。

真理は思い返す。

一体、何があったのか。いや、本当に、何かあったのか。

その時、真理、真理と誰かが呼ぶ声がする。あの、ビッグバンと叫んだ彼だ。

わたしはここよ。

真理は応える。

君にはお礼になった。恩返しをするよ。

やがて、彼によって、ちりじりばらばらとなった真理の意識や体が、その呼びかける声の下で、少しずつ、少しずつ、集められていく。やがて、真理は、元の姿に戻った。その横には、かつて、真理が集めた彼がいた。でも、そこには、父や母はもちろんこと、地球を始め、太陽系、銀河

系はなくなっていた。

真理の横で、彼が笑っている。

いいかい？

彼は真理に囁くと、体を合わす。彼と真理の体一つになると、再び、ビッグバンが起きた。ちりじり、ばらばらになる彼と真理。だが、真理の体の一部から、地球を始め、太陽系、銀河系、宇宙が作られて行く。真理は宇宙の母となった。

まただ。また、聞こえる。微かだけど。

真理がああ、ビッグバンという変な夢を見て以来、音は確実に迫ってきていた。

真理は、天体望見鏡から、目を離す。手で耳の裏から覆い、全ての音を集めようとする。耳をダンボに、パラボラアンテナにする。何の音なのかはわからない。だけど、真理に向かって語り掛けてくる。そう、それは音ではなく、夢で見たように、やはり声なのだ。

父や母に「何か、声が聞こえない？」と尋ねてみるものの、「何も」と声を合わせて答える。二人にはやはり声は聞こえないらしい。

最初は、家のベランダから、天体望遠鏡で夜空を眺めている時だけ聞こえていたが、今は、朝、目覚めた時にも、歯を磨いている時も、朝食を食べている時も、高校への通学中にも、授業中にも、休憩時間中にも聞こえ始めた。

「真理、何をぼおっとしているの？」

親友の梨花が肩を叩く。

「ええ。何でもない」と答えたものの、実は、宇宙からの声の判読に集中していたのだ。

「梨花。何か聞こえない？」と尋ねた時もあったが、

「別に。同級生の会話ぐらいね」と、そっけない返事しか得られなかった。

その時から、自分にしか聞こえない音、声だと知った。

音は、声は、自宅、学校だけでなく、塾での学習中にも、街ブラをしている時にも、生活の一部のように聞こえ始めた。

何かが、何者かが、空から、宇宙から、この地球に、この私に近づいているのか。何のために？私に会いに来るために。

まだ、見ぬ何かに対して、真理は恐怖心よりも好奇心のほうが勝っていた。

その何者かの声を残したい。あたしの声も残したい。真理は、スマホを片手にオーケストラの中でピアノを演奏するように五本の指を動かしながら、空からの声を聞こえるがままに打ち込んでいく。なめらかな指が次第に重くなる。手首が痛い。持ち上がっていた肘は脇腹に付く。二の腕の筋力が引きちぎれそうだ。それでも、声は聞こえてくる。終わりのない調べだ。

それに合わせて、真理は画面に向かって、安打製造機のように正確に打ち続けた。二百文字が二千文字に、二千文字が二万文字に、二十万文字に、二百万文字に。もう、意識を失いそうだ。迷宮の世界の一步手前だ。

声が途切れた。終わった。そして、生まれた。

真理は、宇宙から落ちてくる声と自分の深奥から噴出してくる声を記憶媒体の中に刻み込んだ。これで、例え、宇宙が再びビッグバンをして、あらゆる星や空間、時間が喪失し、自分の肉体も滅んだとしても、この真実の物語だけは残る。はずだ。

「エイリアンズの恋たち」

真理はこの永遠の物語をこう名づけた。